



## 「特別の教科 道徳」の教育目標と公開授業の紹介

中川, 雅道

---

**(Citation)**

研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集, 9(別冊 : 授業実践報告集):93-104

**(Issue Date)**

2025-03-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100494041>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100494041>

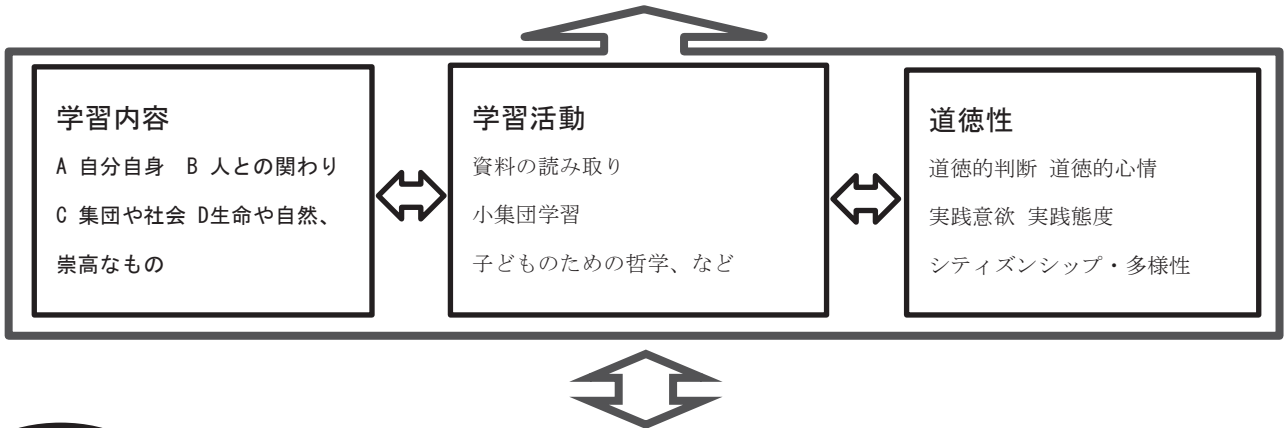


「特別の教科 道徳」の教育目標と公開授業の紹介

1 「特別の教科 道徳」の教育目標

育てたい生徒像

具体的な取組をとともう道徳的価値についての理解を基に、多面的・多角的に考えを深める学習を通して、主体的に自己及び社会の未来を切り拓き、国際的視野を持ち、自他を認め合って行動できる、真理探究の精神に富み、新たな価値を創造する力を育てる



評価

年間を通して、ワークシートを見とることで学習のプロセスを評価する  
年間で学習したワークシートを確認し、総じて評価文言を判断する  
評価する作業を通して子どもたちについて様々な発見があるようにする

2 授業研究会での提案・研究協議のテーマ

道徳の授業づくりと教師の学び

指導要領の内容項目をどのように理解すればよいか  
哲学対話を通して、教員と生徒が学ぶのはどのようなことか

《これまでの実践》  
・異なった手法による道徳授業の実践  
・p4cで何を学べるのかの探究

3 公開授業の紹介

子どものための哲学 philosophy for children の哲学対話

1年【特別の教科 道徳】  
中川 雅道 教諭

【対話する問いは当日提示します】

生徒が設定した問いについて、日本学術会議の提言で示されている「子どものための哲学 philosophy for children」による哲学対話を実践します。

「特別の教科 道徳」 目標

		目標	具体的な取組をとともなう道徳的価値についての理解を基に、多面的・多角的に考えを深める学習を通して、主体的に自己及び社会の未来を切り拓き、国際的視野を持ち、自他を認め合って行動できる、真理探究の精神に富み、新たな価値を創造する力を育てる				
学年	科目・分野等	A 基礎力 (道具や身体を使う)	B 思考力 (深く考える)	C 実践力 (未来を創る)			
		知識及び技能		思考力・判断力・表現力等		学びに向かう力・人間性等	
		I 知識・理解	II 技能 (見つける力) (調べる力)	III 論理的・批判的・ 創造的思考 (まとめる力)	考える力	IV 自立・協同・創造 の力 (発表する力)	
基礎期	1年	道徳 各教科 総合的な 学習の時間 特別活動 など	道徳的価値の理解 A 主として自分自身に関する事 B 主として人との関わりに関する事 C 主として集団や社会との関わりに関する事 D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関する事	周りの人たちの話をしっかり聞き、自分の意見を述べるができる。	周りの人たちの意見を意識しながら自分の立場を明確にすることができる。	問いに対して答える姿勢を持つことができる。	道徳性(判断力・心情・意欲・態度) 道徳的な視点で自分の行いを見つめ、行動することができる。
	2年						
充実期	3年	道徳 公共 各教科 総合的な 学習の時間 特別活動 など		周りの人たちの話を踏まえながら自分の意見を述べたり、議論をしたりすることができる。	周りの人たちの意見をよく聞いた上で、様々な考え方や捉え方を受け容れたり、反論したりすることができる。	問い返しを繰り返すことで、考えを深めることができる。	倫理性(判断力・心情・意欲・態度) 反省的な視点で自分の行いを見つめ、行動することができる。
	4年	E S D 各教科 総合的な 探究の時間 特別活動 など	各教科で登場する道徳的諸価値	基礎期、充実期の学習を様々な場面に活用することができる。	基礎期、充実期の学習を様々な場面に活用することができる。	基礎期、充実期の学習を様々な場面に活用することができる。	市民性・人間性(判断力・心情・意欲・態度) 社会の中で他者とよりよく生きることができる。
発展期	5年	各教科 総合的な 探究の時間 特別活動 など					
	6年						

## 「特別の教科 道徳」における教育実践研究

### 1 教科の研究テーマ

子どものための哲学 philosophy for children の哲学対話

### 2 教科における教育実践研究の視点

#### (1) 育てたい生徒像

具体的な取組をともなう道徳的価値についての理解を基に、多面的・多角的に考えを深める学習を通して、主体的に自己及び社会の未来を切り拓き、国際的視野を持ち、自他を認め合って行動できる、真理探究の精神に富み、新たな価値を創造する力を育てる

中学校では令和元年度より「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」として教科化された。また、高等学校の学習指導要領において、「道徳教育や体験活動、多様な表現や鑑賞の活動等を通して、豊かな心や創造性の涵養を目指した教育の充実に努めること」とあるように、中等教育において道徳の重要性は高まっている。道徳教育は、学校のあらゆる教育活動を通じて行われるものであるが、その要となる「特別の教科 道徳」の充実は急務といえる。

「困っている人がいたら助けなさい」「きまりを守りなさい」「いじめをしてはいけません」等は、中学生、高校生にもなると、誰もがわかっていることである。しかし、人の行動はこの通りにいかないことも多い。良いことだとわかっているにもかかわらず、行わないことがある、悪いことだとわかっているにもかかわらず、行ってしまうことがある。つまり、道徳的判断力、心情、実践意欲が道徳的態度に結びつくとは限らないのである。

本校の道徳では、道徳的諸価値についての理解を基に、対話を通して自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考えることで、道徳的判断力、心情、実践意欲を高めていくと共に、読み物教材などを活用して、他者とよりよく生きるための道徳的態度を育むことを目指している。

#### (2) 教科におけるグローバルキャリア人の構成能力

- A 基礎力…道徳的価値を理解することができる力・周りの人たちの話をしっかり聞き、意見を述べたり、議論を進めたりすることができる力
- B 思考力…様々な考え方、捉え方があることを受け容れ、考えを深めることができる力・問い返しを繰り返すことで、考えを深めることができる力
- C 実践力…他者とよりよく生きることができる力

人の行いを1つとっても、その心の部分には様々な思いが込められている。その思いに気付くことは、他者との良好な関係を構築する上で基本的なことと考えている。

「特別の教科 道徳」が考えるグローバルキャリア人の具体像を踏まえ、グローバルキャリア人の教科における構成能力を3能力とした。

#### (3) 教科の各期目標

##### 基礎期（1・2年次）

- ・道徳的諸価値についての理解を基に、道徳的判断ができる。
- ・道徳的な問題に対して、道徳的心情、実践意欲を高めることができる。

##### 充実期（3年次）

- ・道徳的諸価値についての理解を基に、物事を多面的・多角的に考え、道徳的判断ができる。
- ・道徳的な問題に対して、道徳的心情、実践意欲を高め、道徳的態度へとつなげることができる

##### 充実期（4年次）発展期（5・6年次）

- ・基礎期（1・2年次）、充実期（3年次）の学習を様々な場面に活用することができる。

(4) 目標達成のための学習内容と方法

キーワード： 子どものための哲学 philosophy for children シティズンシップ教育

道徳の時間の学習内容については、22の内容項目を偏りのないよう取り扱うようにしている。

子どものための哲学 (Philosophy for Children : p4c) は、アメリカの哲学者マシュー・リップマンが教室で思考を実践することを目指して開発した教育プログラムである。このプログラムでは①教材・生活の中から自分たちで問いを立てて、②クラスのメンバー全員(教師を含む)で輪になって座り、③持っている人が話すというルールのコミュニティボールを用いて、④お互いへの敬意がある限りで問いについてどんな発言・質問もできるというセーフティを守って議論を進めていく。これは協同で思考することを目指すプログラムであり、生徒たちを発言へと強制することを求めているわけでもなければ、発言することのみを評価するものでもない。生徒または教師の問い返しによって議論を深め、道徳的価値にせまっていく。

(5) 目標達成のための評価方法例

〔評価のポイント〕

- ・年間を通して、学習のプロセスを評価する。
- ・年間で学習したワークシートを確認し、総じて〔評価基準例〕のどれに分類されるかを判断する。
- ・評価文言は簡素にし、評価する作業を通して子供たちについて様々な発見があるようにする。

〔評価文言例〕

主体的に自己及び社会の未来を切り拓くことについて考えることができた  
 国際的視野を持ち、自他を認め合って行動することについて考えることができた  
 真理探究の精神に富み、新たな価値を創造することについて考えることができた

「特別の教科 道徳」の評価例

自己評価の時間に、年間のワークシートを読み、その結果を自分自身で評価を行う。その後、学級担任が学習活動の評価を行う。

内容項目「相互理解、寛容」を主題として、教科書教材「いじめにあたるのはどれだろう」を用いて問いを立てる活動を行い、「なぜ人は人をねたむのか？」という問いが多数決で話し合いの主題として選ばれた。その授業のワークシートを以下のように、評価を行った。

対話前の考え	対話後の考え
いじめたことを言われたら、	ねたみは生きていく上で必要な感情。
いじめたことに対してその人に対してねたみの感情が生まれる。	ねたみをもつことで強くなっていく。
人をねたんでも何にもならないので、	ねたみは必要と
いじめたことに反省しよう。	思いつく。

対話前には、人をねたんでも何にもならないと考えていたが、対話後にはねたみの感情が必要だと考えるようになった。ねたみの問題について主体的に考えた、と評価できる。

道徳





取り入れて、生徒たちが自ら「考え、議論する」授業を行う。ファシリテータとなる授業者も含め、全員が輪の形になって座り、コミュニティボールとよばれる毛糸で作ったボールを用いて対話を行う(コミュニティボールは、学級開きの時間に自己紹介をしながら学級担任と生徒全員で作ったものである)。ボールを持っている人が話し、残りの人たちはその人の話を聞く。発言が終わったら、次に話したい人は手を挙げ、誰も手を挙げていないときには、誰かにボールを渡す。渡された後に、発言したくなければパスすることもできる。授業内で発言しない人もいるが、授業終了後のふり返りを記述したワークシートから各生徒の考えを知ることができ、ワークシートの考えの推移は評価の材料にすることができる。相互評価の時間を設定し、その際にどの評価の文言に適合しているのかを小集団で判断しながら、話されなかった考えについても共有する。

### (3) 教材について

年度当初に教科書を提示し、どの教材を扱ってみたいのかについてのアンケートをガイダンスの時間に実施した(google form)。アンケートの結果を重視し、より多くの生徒が関心をもっている教科書教材を主として扱い、献血や骨髄バンク等、問題を身近にするために講演を実施した。

現在の教科書教材には欠けている観点がある。それは、①単元としての性質が薄いこと、②情報量(知識・技能)の不足の二点であり、この二つの性質は関連している。まずは、相当数の内容項目が挙げられている現状では、数時間以上をかけて多くくりの単元によって、複数の内容項目を教育するという実践が行われにくい。そのため、読み物教材という形で一定のストーリーをもった教材が好まれることになる。しかし、ストーリーには情報の偏りがつきものである。

今回は、中学校1年生の教科書教材に「感動、畏敬の念」としてハワイの火山への感動が紹介されていることをきっかけにハワイについての単元を開発した。本当に燃え盛るマグマに感動できるのだろうか。実際にハワイ島を訪れ(JSPS科研費 JP12345678の助成)資料作成を行った。さらに、4時間の小単元の二つめの教材として、ハワイ/日本の文化としてのアロハシャツについての教材を開発した。

## 2 単元の構成

### (1) 単元の学習目標

道徳的価値に関する問いについて議論を行う。この活動を通して様々な道徳的価値についての深い理解に達するとともに、道徳的判断力を養うこと、様々な葛藤を負いながらも道徳的価値に基づく行動を実践しようとする態度を培うことを目的とする。

### (2) 単元の位置

生活の中で経験した様々な道徳的価値について振り返る機会となる。

### (3) 単元のねらい

①様々な道徳的価値について批判的に考察することで、互いに関連付け、自らの行動に反映させることができる。

②資質・能力の育成の重点

(資質・能力の三つの柱と本校研究主題の資質・能力(3能力4要素)との関係を示す。)

		A 基礎力 (道具や身体を使う)	B 思考力 (深く考える)	C 実践力 (未来を創る)
		知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
		I 知識・概念	III 論理的・批判的・創造的思考	IV 自立・協同・創造の力
充実期	道徳的価値の理解。	周りの人たちの話をふまえながら自分の意見を述べたり、議論をしたりするこ	周りの人たちの意見をよく聞いた上で、様々な考え方や捉え方を受け容れたり、反論したりすることができる。	問い返しをくりかえすことで、考えを深めることができる。反省的な視点で自分の行いを見つめ、行動することができる。

		とができる。		
--	--	--------	--	--

(4) 単元の展開と評価 (全 25 時間)

時	各時の主題	各時の問いと主な活動	各時のねらい(評価の場面)	評価の観点
	事前調査	道徳の授業についての意識調査		
1時	ガイダンス	年間計画、授業展開、評価についての説明。	説明を聞き、理解する。	I III
2時	相互理解、寛容	教科書教材「いじめに当たるのはどれだろう」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
3時	p4c	前時に立てた問いの議論。「なぜ人は人をねたむのか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
4時	友情、信頼	教科書教材「短文投稿サイトに友達の悪口を書くと」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
5時	p4c	前時に立てた問いの議論。「男女の友情は成立するのか」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
6時	思いやり、感謝	教科書教材「その人が本当に望んでいること」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
7時	p4c	前時に立てた問いの議論。「今の状況からどんな人がどう由紀の気持ちを盛り上げるのか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
8時	向上心、個性の伸長	教科書教材「自分の性格が大嫌い」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
9時	p4c	前時に立てた問いの議論。「性格がいい人はモテるのか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
10時	公正、公平、社会正義	教科書教材「席替え」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
11時	p4c	前時に立てた問いの議論。「男子と女子はそれぞれ相手のことをどう思っているのか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
12時	自己評価	年間のワークシートについて評価の考え方と照らしあわせながら自己評価できる	年間のワークシートを自己評価する。	III IV
13時	遵法精神、公德心	献血講話(日本赤十字社)から問いを立てることができる。	講話を聞き、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
14時	p4c	前時に立てた問いの議論。「今、もう一度献血を始めた方がいいのではないか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
15時	生命の尊さ	教科書教材「決断! 骨髄バンク移植第一号」から問いを立てることができる。	資料を読み、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
16時	p4c	前時に立てた問いの議論。「なぜ関係のない人の命は重みを感じにくいのか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
17時	希望と勇気、克己と強い意志	骨髄バンク講話(日本骨髄バンク)から問いを立てることができる。	講話を聞き、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
18時	p4c	前時に立てた問いの議論。「人が生きる意味とは?(肉体、精神、経済、社会など、さまざまな苦痛に耐えて将来もわからず苦しみにあえぐ日々を過ごしてまで人が生きる意味とは?)」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
19時	節度、節制	ICT講話「スマホとどう付き合いますか」から問いを立てることができる。	講話を聞き、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
20時	p4c	前時に立てた問いの議論。「子どもにスマホを与えるべきか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV

21時	感動、畏敬の念	教科書教材「火の島」、ハワイ島ハナマウマウ火口などの写真、映像を見て、問いを立てることができる。	講話を聞き、考えるための問いを立て、一つを選ぶ。	I III
22時	p4c	前時に立てた問いの議論。「生きることに感動は必要なのか？」など。	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
23時	郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	アロハシャツと日本人：なぜ日系移民は自分たちの文化を捨てなかったか？という講話から問いを立てることができる。	道徳的価値の理解を深める。	I III
24時(本時)	p4c	「アロハシャツと日本人」の内容から生まれた問いについて対話することができる	問いについて話し合う。道徳的価値の理解を深める。	II IV
25時	自己評価	年間のワークシートについて評価の考え方と照らしあわせながら自己評価できる	年間のワークシートを自己評価する。	III IV
	事後評価	ワークシートなどの評価		

(5) 評価の観点

I 知識・概念    II 技能    III 論理的・批判的・創造的思考    IV 自立・協同・創造の力

3 本時の学習 (25時)

(1) 本時の主題 「アロハシャツと日本人」 についての対話

(2) 本時のねらい

①道徳的価値を多面的・批判的に考え、自分自身と対比させて反省的に自身の生き方を捉え直すことができる。

②資質・能力育成の重点

(資質・能力の三つの柱と本校研究主題の資質・能力(3能力4要素)との関係を示す。)

A 基礎力 (道具や身体を使う)		B 思考力 (深く考える)		C 実践力 (未来を創る)	
知識及び技能		思考力・判断力・表現力等		学びに向かう力、人間性等	
I 知識・概念	II 技能	III 論理的・批判的・創造的思考		IV 自立・協同・創造の力	
様々な道徳的価値を踏まえて多面的・批判的に考え、対話の中で反省的に自身の生き方を捉え直すことができる。					

(3) 教材について・方法について

本時においてもこれまでと同様に、対話を主体として授業を展開する。

(4) 本時の展開

時	学習の流れ	生徒の活動	指導上の留意点・評価
0	問いを決める	○輪になって着席する。 ○という問いから考えてみたい問いを右の問いの中から多数決で選ぶ。 ○問いについての考えを書く。	1. 郷土を愛す必要があるか？ 2. なぜ国ごとに服の違いがでるのか？ 3. アロハシャツはかわいいのか？ 4. 同じ人間であるのに、育ち方によって食の好みが変わるのはなぜか？
5	おおあらし(フルーツバスケット)	○席を入れ替えるアイスブレイクを行う。	
10	p4cを行う上でのルールの確認 問いについての議論	○問いの立案者から、問いの設定理由を説明する。 ○問いについて議論する。	○進行役として振る舞う。  ○理由・前提・推論・例・反例・真理など、論理に留意して質問を考える。
45	まとめ	○本時のまとめをワークシートに記入する。	(評価)：評価資料(ワークシート) 道徳的価値を多面的・批判的に考え、自分自身と対比させて反省的に自身の生き方を捉え直すことができる。(IV)
50			

(5) 評価の目安

IV 自立・協同・創造の力：道徳的価値を多面的・批判的に考え、自分自身と対比させて反省的に自身の生き方を捉え直すことができたか。

【資料】公開授業で使用するもの 『新訂 新しい道徳1』東京書籍、令和3年2月10日発行。

## 4 研究授業の記録及び分析

### (1) 学習活動

教材「アロハシャツと日本人：なぜ日系移民は自分たちの文化を捨てなかったのか？」という教材を作成し、内容項目「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」（郷土の伝統と文化を大切に、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め、地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めること）から個人で問いを立て、教員が4つに絞った問い（①郷土を愛する必要があるか？ ②なぜ国ごとに服の違いがでるのか？ ③アロハシャツはかわいいのか？ ④同じ人間であるのに、育ち方によって食の好みが変わるのはなぜか？）を板書し、投票を行った。多数決で、①の問いが選ばれた。

議論の流れは、次のようなものだった。最初に、意見を明確にするために、郷土を愛する必要があると思う人と郷土を愛する必要がないと思う人を挙手してもらってから、議論を始めた。ちょうどそれぞれの意見に同数ぐらいの手があがった。

- 必要がある。自分の育った町や思い出を大切にすることだから。
- 必要がない。自分の郷土だけが重要なのではなく、様々な土地について知ることが大事だから。
- 自分の郷土への愛から、他の土地を差別する人も出てくる
- 「郷土」「愛する」の定義を決めないと、議論が進まない。
- そもそも、郷土があると思っている人は、愛しているのではないか。郷土があると思っている、愛していない人は、おそらくいない。



写真1 子どものための哲学の議論の様子

### (2) 学習評価

まずは、評価についての大枠を確認しておきたい。「第1章総則の第1の2の(2)に示す道德教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道德性を養うため、道德的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道德的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」（中学校学習指導要領）。道德の授業の評価を考える際には、常にこの目標に立ち返る必要がある。評価については、次のようにも述べられている。「生徒の学習状況や道德性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする」（同上）。計画的に行われる授業の中で、道德性に係る成長の様子を把握することが評価なのであって、内容項目の理解を評価するわけでも、道德的実践力を直接評価するわけでもない。

「各学校においては、道德教育の全体計画に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動との関連を考慮しながら、道德科の年間指導計画を作成するものとする。なお、作成に当たっては、第2に示す内容項目について、各学年において全て取り上げることとする。その際、生徒や学校の実態に応じ、3学年間を見通した重点的な指導や内容項目間の関連を密にした指導、一つの内容項目を複数の時間で扱う指導を取り入れるなどの工夫を行うものとする」（同上）。道德教育の全体計画は学校の教育課程のすべてに及ぶ、非常に大きな規模の計画である。年間計画を立てる意味は、教員間で相互理解を図り、道德教育の改善に役立てるためにある。しかし、道德教育の目標をすべての教員で定めることは大きな労力を伴う。そこで、評価の文言を、学校の教育目標に準じるように作成し、教育目標が同時に、道德教育の目標であるという形式に統一した。

内容項目は、各学年ですべて取り上げることとなっている。年間35時間を目安とする1単位の科目の中で、機械的に22項目すべてを行うことは、考え、議論する授業の方針に反する可能性がある。思考プロセスを重視するためには、大枠での「A自分自身に関わり」「B人との関わり」「C集団や社会との関わり」「D生命や自然、崇高なものとの関わり」をバランスよく配当することが一つの解決になる。複数の内容項目はまとまりごとに連関をもつ。関連に留意し、一つ以上の内容項目を同時に扱うことも不可能ではない。年間計画の進行の結果、主たる内容項目として扱えなかったものがあっても、校内で共有し、少なくとも3年間のうちにすべてを扱えるようにするという工夫も必要だろう。

### (3) 授業分析

今回の授業研究のテーマのひとつは「道徳の教材を作成する」ことだった。4時間の小単元「ハワイ」を構想し、実際に教材を作成し、対話の授業を実践した。2時間のまとまりで「ハワイの火山」を扱い、さらに2時間のまとまりで「アロハシャツ」についての授業を行った。

「ハワイの火山」では、教科書教材「火の島」を主軸にしなが、なぜハワイの自然に感動するのかを、授業者が実際にフィールドワークをして撮影した、ハワイ島のハレマウマウ・クレーター映像、ハワイ島の道路と景観の様子を上映し、火山の造成作用が島全体の生態系を育てていることを説明した。ひいては、地球の全体を覆う大地がそのような火山の造成作用から生まれたものであることに注意を促し、感動することについての説明を行った。

「アロハシャツ」の教材を、以下に引用する(本来は指導案に含まれるべきものであるが、今年度は紙幅の都合、及び教材開発という目的から便宜的に、ここに授業分析に掲載する)。

#### アロハシャツ誕生の背景

1868年(明治元年)に初めて移民として海を渡った「元年者」以降、20世紀初頭まで多くの日本人がハワイへと移住した。開拓民の彼らのほとんどがサトウキビ畑の労働者として働いた。当時、農園で着ていた作業着が「パラカ」と呼ばれる開襟シャツ。ヨーロッパの船員たちが着ていた長袖の上着が起源の、青いチェック柄の木綿地で作られたそのシャツは、日本人にとってなじみの深い縞(かすり)に風合いが似ていたことも手伝い日系移民に浸透した。このパラカシャツが、現在のアロハシャツの原型になったと言われている。アロハシャツの発祥には諸説ある。決定的な資料も残っておらず今となっては断定することができないが、日系移民の存在が深くかかわっていることは間違いない。移民が日本から持参した着物や浴衣が古くなると、その端切れを使って子ども用にパラカ風シャツを仕立てて着せていたという。和装独特の色や柄が現地の人々や観光客に新鮮に映ったことは容易に想像でき、着物や浴衣用の新しい生地を使って仕立てた開襟シャツが人気を博し、徐々に広まったと推察できる。事実、農園での労働者であった日系移民はやがて街中の様々な分野の農業に就くようになり、1900年を過ぎた頃にはホノルルに多くの仕立て屋や呉服店を営んでいた(ヴィンテージアロハシャツブック『LAND OF ALOHA』監修小林享一、朝日新聞社、2010年、p.8)。



写真2 前掲『LAND OF ALOHA』より

この教材から、なぜハワイに渡った日系移民たちが郷土の文化を捨てなかったのか、を考察した。ムサシヤが制作した初期のアロハシャツには、日本人が好む、寺社仏閣、紅葉、桜などが散りばめられている。また、オアフ島のハワイ出雲大社、ハワイ島のヒロ大神宮の実際の写真も提供し、日本人が海外に渡っても日本文化を守っていた様子を伝えた。

#### (4) 成果と課題

考え、議論する道徳を実践するためにp4cを行うことが有効であると、これまで繰り返し論じてきた。今年度は、現在の教科書教材が、考え、議論する実践をサポートするかたちで作られていない欠点を補うために、フィールドワーク、文献調査に基づいて教材を作成した。それらの教材の完成が、今回の授業研究のひとつの成果であると言えるだろう。特に、授業者が実際にフィールドワークをして作成した数々の資料は、子どもたちの生活から離れやすい道徳の内容項目に実質的な内容を与え、臨場感のある教材となったことは大きな成果だった。

しかし、実際に教材作成に携わると、道徳の教材を作成することがいかに困難かということがよく理解できた。そのことを以下に列挙して、今後の課題としたい。

##### ① 単元を作るための時間的制約

上記したように35時間で22項目を扱わなければならない以上、時間的な制約という困難は単元を設定する上で計り知れない影響を与える。理想的には、22項目をすべて網羅するようなテーマを構想し、そのテーマのもとで教育を行うべきである。しかし、認識の深化を生むような学習材、文字情報、視覚情報、聴覚情報、場合によってはフィールドワークなどを組み合わせて教育することは、本当にできるだろうか。実現できたとしたらほとんど神のなせるわざである、としか言いようがない。

##### ② 教材を作るための大きな負担

授業者は科学研究費に基づいてオアフ島、ハワイ島で調査研究を行い、教材を作成した。経済的負担は言うまでもないが、時間的負担もかなりのものになる。また、そこまで大きな研究になると教員間での教材の共有もほぼ不可能になる(主として情報量の多さのため)。多くの場合、学年担当が進めることになる情報共有、計画立案の負担は幾何級数的になる。

##### ③ 授業形式の困難

②と連続的な困難になるが、例えば今回作成した教材を、教材作成者以外が授業で使うと、やはり情報量の多寡、教材に対する熱意、リアリティによって、問いを立てるプロセスに差が生まれるだろう。それを避けるために多くの場合、1学年全員を対象にした講義、講演というスタイルが選択されやすい。当然のことであるが、受講人数が増えれば増えるほど、講師による各生徒へのケアは薄まることになる。また、学習方法にも人数の多さから制約がかかり、通常の授業よりも相互作用が生まれにくくなるという困難が生まれる。

##### ④ 道徳は知識・技能に依存しているという疑問

ここまで説明した①～③の困難はほとんどが手段や方法に関わる困難である。しかし、これらの問題から、もうひとつ、別の問題が見えてきた。それは、道徳の授業に感動したり、共感したりするためには、知識、技能が重要なのではないか、という論点である。例えば「ハワイの火山」という主題に感動する人は、地理学、地球科学の知識を豊富に持っているのではないか。民俗学に含まれる服飾の知識や、美術史学・美学に含まれるデザインの知識があるかどうかで、「アロハシャツ」という主題にコミットできるかどうかがある程度決まるのではないだろうか。道徳の時間が、家庭での知育を評価することになっている可能性がある。

今後、これらの課題を受けて、困難を解決するために、さらなる教材の作成に取り組みたい。